

特集：2015年度学会シンポジウムを振り返って

貧困とその形態をめぐって

—貧困の分布とダイナミズム—

Polymorphic and Dynamic Forms of Material Poverty

岩田 正美

Masami Iwata

1. はじめに一多様な「～の貧困」論をこえて

日本では貧困への社会的関心が依然薄れていない。バブル崩壊後、10年ほど経ってから一種の貧困ブームが起きたが、それが一過性のものではなく、アベノミックスによる景気浮揚策・デフレ期待の中でも持続していることは、驚くべきことかもしれない。とりわけ、「子どもの貧困」は政府によって積極的に取り上げられ、社会保障削減のトップバッターとしてワークフェア型に再編されていた児童扶養手当額引き上げが約束されるなど、政策対応も変化している。むしろその背後には、出生率回復への期待があり、また「子どもの貧困」はマスメディアにとっても、その「正義感」を発揮しやすいテーマであることは確かであろう。

他方で、「下流老人」という本が話題となり、団塊世代の高齢化と歩調を合わせて、老後不安を拡大させている。社会保障費削減のターゲットは高齢者へ向かいつつあるが、そのことも「下流化」するのではないかという中高年者の不安を煽っているかもしれない。実際に、生活保護の増大の中心は高齢者であり、被保護者の高齢化率は一般のそれよりよりずっと高い。その他、「女性の貧困」なども一般受けしやすい貧困の議論である。ただし、これは、前二者と比べると、つかみ所が難しく、問題は顕在化しにくいところもあるので、マスメディアも扱いにくそうである。

ところで、このような「～の貧困」という括り

は、政策対象のターゲット化に容易であり、また一般受けもしやすいので、そうした議論が高まるのはやむを得ないかもしれない。しかし、いささか妙な感じもする。「子どもの貧困」と「下流老人」は、20世紀初頭にシーボーム・ラウントリーの分析したライフサイクル上の貧困リスク＝養育費と労働市場から引退後の収入の途絶を示しているだけの話ともいえるからである。つまり、両者は標準的な不熟練労働者のライフサイクルの軌跡の中に顕在化する貧困リスクであると考えれば、それは「子どもの貧困」「下流老人」ではなく、ライフサイクルと貧困という把握がより正確のはずである。むしろ、20世紀を通して模索された福祉国家は、この二つの典型的貧困リスクと、疾病、失業時における貧困リスクの予防のネットを構築してきたのだから、それが一般的に破綻してきたとすれば、一般的な貧困予防が弱体化してきたという問題となる。

だが、最近の日本の論調は、必ずしも子ども一般、高齢者一般の話でもなさそうである。「子どもの貧困」のターゲットは、ひとり親世帯を代表とする低所得世帯の子ども養育期の問題であり、「下流老人」も低年金、無資産、単身の高齢者問題の側面が強い。とりわけ女性の貧困は、家族の中に庇われた専業主婦などの「潜在的貧困」を除けば、決して女性一般ではなく、不安定な社会階層や家族の変化と関連した問題であることは疑い

もない。

「～の貧困」論は、こうした問題のより本質的な見方を回避し、表面をなぞって終わってしまう可能性があるという意味で、貧困論にとっては、あまり生産的な議論にはなりにくい。大きく変貌する21世紀社会の貧困を捉えるには、そうした表層レベルを掘り進んで、現代の貧困が出現・深化していくメカニズムの総体に迫る必要がある。本稿では、日本のこれらの「～の貧困論」を超えて、貧困論をさらに深め、したがってその有効な対策を引き出していくための枠組みとして、貧困の異なった「形態」への注目と、その形成・転換のメカニズム、あるいは貧困に「なる」・貧困から「脱出する」というダイナミズムの理解が必要なことを示してみたい。

2. 貧困論の拡張—排除論と言説論

上に述べてきた「～の貧困」の論拠として使われているのは、主に貧困率である。とりわけ「子どもの貧困」は、OECD等国際機関が国際比較のために作成している相対所得貧困率の日本の位置がワーストにランキングされていることが根拠とされている。この相対所得貧困率は、世帯人数・構成を反映した等価所得を使い、その中位数の40%,50%,60%などで貧困線を設定している。伝統的には、先のラウントリーのマーケットバスケットによる最低生活費額など生活費を用いる方法もある。またピーター・タウンゼントの相対的剥奪指標と所得との関係から、剥奪指標が一気に増大する所得の閾値を使う方法もある。いずれにしても、ここで貧困とは貨幣量の多少であり、貨幣によって秤量されることに違いはない。

「お金がない」=貧困という観念は、貨幣経済社会の高度な段階である現代社会では、きわめて当然のことである。貧困が貨幣で計測可能になったが故に「～の貧困」の発見が容易となり、また

国際比較も可能となっている。さらに貧困の予防や救済の中心が所得保障となることもまた自然の流れである。

こうした貨幣貧困ないしはそれが含意する物的欠乏状態=貧困という見方に対して、近年2つの角度から異なった見方が提示されてきた。一つはヨーロッパ連合の社会統合の戦略的用語ともなっている社会的排除という見方である。もう一つは、イギリスの貧困研究が、南半球における貧困のもつ意味をも視野に入れて模索してきた、貧困の幅広いとらえ方がある。特にリスターは、多様な文化の下での貧困の多様な概念を組み込んだ「特定文化と関連していると同時に普遍的な」貧困論を試みている (Rister, R. 2004:3)。社会的排除については、ヨーロッパで多くの研究があり、筆者も別にまとめたことがあるので繰り返さないが、要は貨幣量だけでなく社会関係から排除されるという点を強調した概念である (岩田2008)。具体例としては、1980年代以降のヨーロッパの若者の長期失業 (労働市場からの排除) と、それゆえ生じた福祉国家からの排除がある。

本稿では、リスターの「特定文化と関連していると同時に普遍的な」貧困論を出発点に置きたい。リスターは、まず貧困を「①概念 concept」「②定義 definition」「③測定 measurement」の三つのレベルに分解している (Lister, 2004:3-6)。概念とは、貧困の意味や理解を示すが、それは貧困を経験している人びとにとっての意味とそれ以外の集団にとっての意味の双方が含まれ、これらは立場の異なる集団の「言語とイメージ」で表現される「貧困の言説」によって構築されていく (同:3-4)。貧困の定義は、貧困と貧困ではないものを区別する、より正確なステートメントである。さらに測定基準とは、先に述べた所得や生活水準、剥奪指標等の具体的な貧困把握の操作手法である。リスターは、この3者の関係を、①→

②→③の順序で捉え、貧困の議論が、いきなり③の測定基準から始まるのが少なくないが、それは近視眼的であって、①の貧困の意味（主観的経験的、あるいは他の集団の言説）を問うことなしに測定研究に走るのは危険だと注意している。

リスターの強調点は、貧困の意味における非物質的な側面への着目にある。これは貧困状態にある人々と社会との相互作用から生まれるものであり、その意味で貧困の「関係的・象徴的側面」と特徴づけている。だが、この関係的側面は、貧困のコアとしての物的欠乏と切り離して議論されるのではなく、貧困の車輪というアイデアで、一体的に把握することが可能であると考えたところに、リスターの卓越さがある。図1がこの貧困の車輪である。

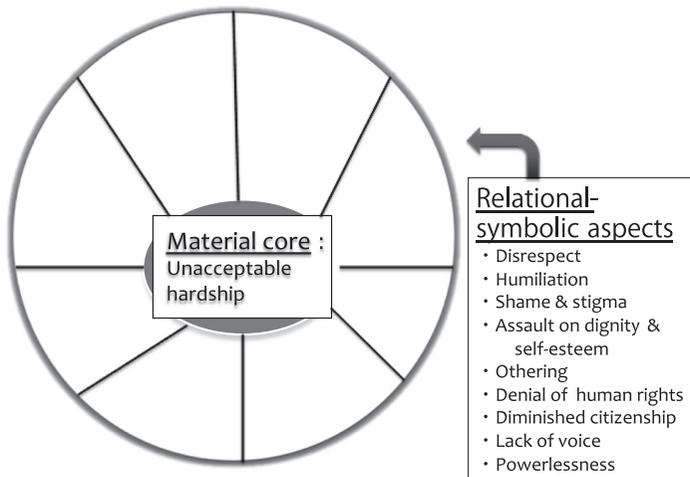
リスターは、車輪の軸に、受け入れがたい困苦として物的欠乏というコアを置き、「関係的・象徴的」側面は、外輪に配置して、貧困という物的欠乏のコアが回り出すと、外輪にある「関係的・象徴的側面」が一緒に回り出すという、巧みな説

明をしている。この場合、コアも外輪も特定社会によって作られ、定義されていくものであることも強調している。また、外輪にある「関係的・象徴的側面」の内容は、貧困への一般社会の蔑視、スティグマの付与、貧困経験者の「他者化」、人権やシチズンシップの縮小や否定だけでなく、貧困の中にある人々の無力や声の出しにくさ、自己評価の低さなどを含んでいる。経験者の経験する貧困の意味と社会が付与する意味も一体的に捉えようという試みでもある。

3. 物的貧困にも、異なった形態がある

とはいえ、このリスターの貧困の車輪図で物足りないのは、コアに置かれた物的欠乏の扱いの「素っ気なさ」である。コアであることを強調することによって、貧困を「関係的・象徴的」側面＝言説だけで捉えなかったのは、さすがというべきであろうが、貧困の意味をより深く問うとすれば、コアにある物的欠乏とこれによる困苦が一樣ではないことにも、注意すべきではなからうか。

図1 リスターの貧困の車輪



* Material and non-material wheel of poverty; Lister, R. 2004:8

コアにある物的欠乏それ自体が多様な「形態」と分布をもつことへの着目が貧困研究の当初から存在していることにもっと留意すべきである。本稿では、この物的欠乏の多様さと分布を、貧困の形態と名付けてみたい。それは貧困の測定法には取まらない、リスターの言う貧困の意味そのものとも強く関連している。

3-1 貧困のダイナミクス：貧困の長さや深さ

貧困の測定において、貧困量だけではなく、その継続期間の長さや、深さ（貧困線からの隔たり）がしばしば問われてきた。リスターは、それは測定法の問題と考えているようだが、そのような測定が意味をもつのは、長さや深さによって、コアにある物的欠乏の形態が変化するからである。失業がしばしば摩擦的・構造的の区別をつけられるように、あるいはマルクスの相対的過剰人口論が、流動的・潜在的・停滞的の形態の区別をつけたように、貧困のコアにある物的欠乏も、貧困線ギリギリの程度もあれば、貧困線からの隔たりが大きいものもある。貧困持続期間が一時的なものもあれば長期的なものもある。欧米では社会調査の主流となっている長期縦断調査（パネル調査）の手法をとると、貧困が一時的な現象で終わる人々と、長期継続する人々を区別することが出来、またどのような人々が後者に属するかも分析可能である。長期継続的な貧困は、それらの人々が生きていくための不規則で不安定な職業を創出し、世代的再生産を含めて、貧困の固定化に向かう。

エスピン・アンデルセンは、シュンペーターを引用して、貧困を乗り合いバスに喩えたことがある。すなわち、乗り合いバスがいつも満員だとしても、乗客の顔ぶれが代われば、社会としては大して問題ではない。だがこの乗り合いバスに鍵をかけられてしまった状態＝同じ人々が貧困に釘付けにされることがあると、社会にとって大きな問

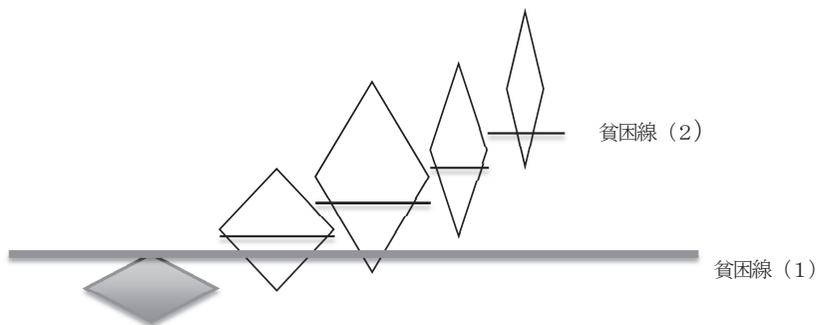
題になる。対策も、「今ここでの平等」から「ライフコースを通じたチャンスの保障」に移行しなければならないと指摘している（エスピン・アンデルセン 2000:255）。つまり、一時的貧困の形態と、固定的・停滞的貧困形態の存在は、異なった政策を要することになる。

先のラウントリーのライフサイクルと貧困は、一時点調査の結果をライフサイクルとして組み替えたものなので、景気変動や産業の交代、社会構造の変化が反映されていない。他方で、ラウントリーが、貧困を2種類描いていることにも注目したい。有名なマーケットバスケット方式による第一次的貧困と、これとは別に家計のやりくりや浪費などから生じる物的欠乏を示す二次的貧困である。つまり、異なる貧困が二つあると、ラウントリーは言っていることになる。

また、ラウントリーのヨーク市の貧困調査も、彼が参照したチャールズ・ブースのロンドン調査も、その結果表示にあたっては、職業階層および街区との関連表・図が作られている。後者の空間分布についてはすぐ後で述べるが、職業階層との関連は、貧困が近代資本主義の中心的職業にも広く分布していることだけでなく、「浮浪」「日雇」「臨時」労働者や、自営業層への高い割合での集中をも示している。マルクスは、停滞的過剰人口は「現役労働者軍」の一部をなしているが、その就業は不規則であり、資本の固有の搾取部門の基礎となっていると述べている。これらの過剰人口の「一番底の沈殿物」として受給貧民の領域があるが、これらも「相対的過剰人口の生産のうちに含まれており、その必然性は相対的過剰人口の必然性に含まれている」（マルクス（邦訳）1968:838-839）。当時世界の工場であったイギリスの貧困分布もまた、停滞的過剰人口やその沈殿物との深い関係を示したといえよう。

ところで、本学教授でもあった江口英一の社会

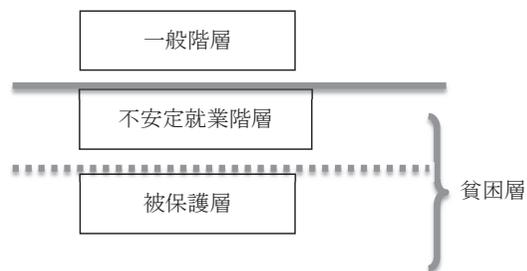
図2 社会階層アプローチによる2つの貧困線



階層論アプローチによる貧困研究は、こうした「形態」の違いを前提に、貧困の長期ダイナミズムを社会階層移動として描こうとしたものであった。江口は、ブースの職業階層と生活水準のレベルの違いの両者を含んだ、社会階層概念を構築し、この社会階層が、産業循環や従来の社会階層の分解の中で、一定の「序列」を与えられ、それぞれの階層ごとの生活水準を維持しようとしていると仮定する。すると、「貧困化」とは、同一階層内での生活水準の低下による「下降」とそこからより下位の階層への移動＝「転落」の二つの型をもって出現する。これを図式化すると、図2のようになる。ここでは、貧困線は、それぞれの階層ごとに設定されるものと、全体の線の二重に引かれ、階層内下降と階層転落の二つの移動を通して、最下層が形成されていくことになる。

なお江口は、その後就業構造基本調査の再集計や国勢調査データによる社会階層構成表の作成を通して、貧困層を、被保護層とこの給源となる不安定就業階層の二つに単純化して示すようになる(図3)。不安定就業層の一つの典型は、日雇労働者である。むろん、江口のアプローチは、1950年代から60年代の日本の状況が背景にあり、社会階層の中心をなす職業階層と生活水準の関係も、現代では問い直されなければならないことは

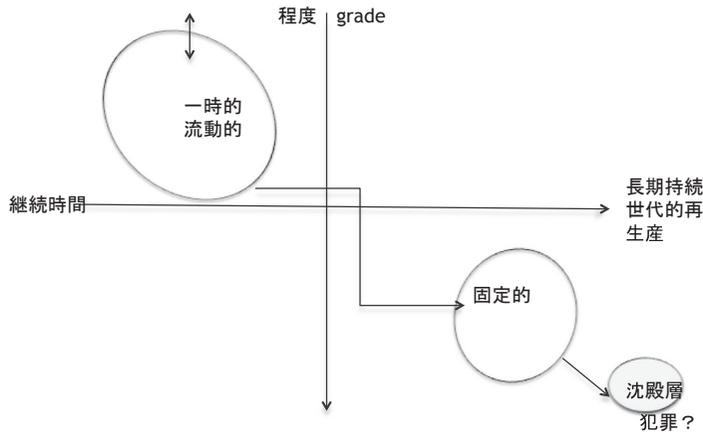
図3 社会階層と貧困の簡単図



いうまでもない。だが、重要なことは、貧困線への拘りよりは、貧困の社会階層分布とその間の移動＝下降移動のダイナミズム、つまり貧困になっていくプロセス＝貧困化に、貧困の本質をみていることである。これはリスターの言う貧困の意味とは異なる。

こうして、物的欠乏もまた一様ではなく、社会階層装置を介した上昇・下降の運動の中でいくつかの形態を与えられていく。実は、その形態の違いこそが、リスターの貧困の車輪の外輪＝貧困の「関係的・象徴的側面」と結びつく、と考えた方がわかりやすいのではないか。たとえば、非正規労働者、被保護母子家庭、寄せ場の日雇労働者などへの社会の眼差しや、それらの人々の経験は、決して一様ではなからう。それは、物的欠乏それ自体の形態が異なることと深く結びついているの

図 4



* 物的欠乏の形態：欠乏の深さと時間

ではないか。なお、この時間軸と固定化を示せば、図4が描ける。

3-2 空間的集積

物的欠乏の持続時間とその深さが、物的欠乏の形態に影響を与えることに加えて、物的欠乏状態にある人々が、一定空間に集積される傾向にも注意が払われるべきだろう。もともと、貧困は、空間に集積された貧困、すなわち貧民街・貧民窟、スラムなどの中で把握され、そうした空間それ自体の意味と共に解釈されてきたものに他ならない。貧困が貨幣の一定量で秤量されるようになったのは、スラム＝貧困から、スラムの誰を貧困とするか（誰を救済するか）、という個別世帯への着目の変化の中で生じている。他方で、スラムという空間それ自体も、その表現の仕方の変化はあるにせよ、社会問題として継続的に取り上げられてきている。それは、こうした空間における貧困の蓄積が、貧困層以外の人々の生活の安全や、公共空間の確保問題と深く関わり、結局のところその排除が求められざるを得なくなるからである。

ブースのロンドン調査の意義は、全体としての

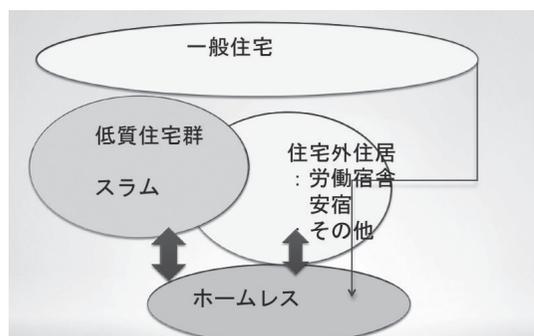
貧困率の計算にあったと言うより、ロンドンの街区を、生活水準の差異で色分けした貧困の分布＝貧困マップの作成にあったといっても過言ではなかろう。この詳細な貧困マップは、現在ロンドン大学のチャールス・ブース アーカイブに収録されており、その全部を現在の同じ地区の地図と比較しつつ閲覧することが可能である。日本でも戦前から多くのスラム調査の伝統があり、そこでは単なる表層的な観察を超えて、多様なスラムの類型とその貧困の意味が語られてきた。こうした貧困の空間的分布は、先に述べた職業分布とも関連して、その停滞的形態や「沈殿物」が空間の中にさらけ出されていることを意味している。近代化のプロセスは、大規模スラムの撤去や都市のジェントリフィケーションに向かうが、貧困の空間的形態のもつ重みは変化していない。なぜなら、人々の生活が一定の空間を必要とする以上、より深く長期の貧困は、その特定の隠れ場所を、特定の不規則な就業形態と共に、求め続けることになるからである。

1970年代後半から80年代にかけて、欧米では「新しいホームレス」論が盛んになった。日本で

はやや遅れて90年代半ば頃から、公共空間へ貧困がその赤裸々な姿を現したが、それは低所得としての物的欠乏とは異なった意味を当事者にも社会にも与えたことは言うまでもない。ところで、ホームレスを巡る研究では、ホームレスの数だけでなく、どこからホームレスが生まれてくるのか、という問が絶えず投げかけられてきた。欧米では、精神病院の閉鎖との関係、軍隊からの除隊、大都市のワンルームアパート、郊外の公営住宅、難民収容所などの存在が指摘されてきた。つまり、江口が日雇労働者を典型とするような不安定就業から被保護層が生まれてくる経路に着目したように、ホームレスを生み出す、固有の居住空間の存在が共通に指摘されてきている。

筆者が行ってきた日本のホームレスの調査によれば、その出現経路は、図5のようなものであった。すなわち、一般住宅からストレートに路上へ現れると言うよりは、その手前に受け皿としての、特殊な居住空間がある。日本の特徴は、会社の寮や借り上げアパートなどの労働住宅が大きな比重を占めていることである。また、簡易宿泊所などの安宿、近年ではネットカフェやサウナ、ファストフード店など、さらに病院や福祉施設、刑務所など矯正施設などの多様な「住宅」以外の居住空間の存在が見いだされた。このように、貧困という物的欠乏は、その空間的形態とセットとして把

図5 ホームレスへの経路と貧困の空間的形態



握され、そのことにもよって意味づけを与えられてきたのである。

4. おわりに～貧困のダイナミズム

リスターの貧困の車輪という理解は、コアにある物的欠乏と、外輪の「関係的・象徴的側面」(言説)の両者の関係をうまく示したものである。だが、貧困の経験やそれへの社会の言説は、物的欠乏による困苦一般と直接結びつくというよりは、物的欠乏による困苦それ自体が、いくつかの形態に枝分かれし、あるいはいびつな分布をとっていくことと結びついている、と考えた方が分かりやすい。言い換えると、貧困のコアにある物的欠乏も物的欠乏一般として存在しているのではなく、ある形態を与えられている。与えるのは社会のそれぞれの構造とその変化である。そのような物的欠乏の形態の差異こそが、貧困の「関係的・象徴的側面」に強い影響を与えてきた可能性が高い。

したがって、リスターのいう貧困の意味は、本来そうした経済的欠乏の階層的・空間的分布と、個々人がこの分布の中を移動して回るダイナミズムをうちに秘めているものとして理解すべきではないか。リスター自身が述べているように、貧困のただ中にある人々の抵抗や政治的振る舞いが、どのように抑圧され、あるいはどのように発揮されるかが、貧困の意味にとっても大きな問題である。だがそれは、静態的には把握できない。江口が言うように、貧困とは貧困化のプロセスであり、貧困の意味は、「貧困になる・貧困に留められる・貧困から脱出する」といったダイナミズムとの関係でしか、確かめることは出来ないように思われる。社会的排除論は、もともとこのダイナミズムに注目しているが、貧困の意味もまた、貧困化のプロセスの中で貧困の車輪という枠組みをあてはめてみるのが重要であるように思う。

「～の貧困」は、むしろリスターの言う一つの

貧困言説である。その根拠としての貧困率に意味がないわけではないが、一時点の統計量やその比較は、測定方法やデータの問題だけでなく、貧困のコアにある物的欠乏の特有の形態を示すわけではないので注意が必要である。貧困の意味を問うことは、まず第一に、リスターの貧困の車輪のコアにある物的欠乏の形態へのより深いアプローチと、貧困化のプロセスを明らかにしていくことではないか。「関係的・象徴的側面」の分析は、これらのダイナミズムと結びつけられた時、はじめてそれへの注目の重要性が、くっきりと浮かび上がってくるように思われる。

文献

- 江口英一 (1979) 『現代の「低所得層」上・中・下』 未来社
- エスピン・アンデルセン, G. (渡辺雅男・景子訳 = 2000) 『ポスト工業経済の社会的基礎』 桜井書店
- 岩田正美 (2008) 『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』 有斐閣
- リスター, R. (2004) *Poverty*, Polity Press
- マルクス, K. (マルクス = エンゲルス全集刊行委員会訳 = 1968) 『資本論第1巻第2分冊』 大月書店